

菩提樹と人間革命

ロケツシユ・チャンドラ

壇上の皆さま、そして聴衆の皆さま。私はこんなことを記憶しています。1979年、池田大作会長が、インド政府の招待でデリーにいらっしやいました。その際、会長は菩提樹を所望されたのですが、外務大臣は菩提樹のことを知りませんでした。私が説明しますと、そんな大きな木を飛行機にどうやって乗せるのかと聞くのです。私は会長に、私の「菩提樹の盆栽」を差し上げました。高さは1フィート（約30センチ）くらいでした。小さいながら枝ぶりがよく、美しい菩提樹でした。結局、税関で引っかかってしまい、日本に持ち込むことはできませんでしたが。

しかし、皆さん。現在、私たちは、デリーにこの広大な菩提樹園をもっているのです。

（※池田SGI会長の提唱によって、1993年9月、「創価菩提樹園」がニューデリー近郊に開園）

菩提樹が象徴するもの

菩提樹は存在に価値を与える重要な働きを表しています。ここでは物質性と精神性が融合しています。両者は調和していなければなりません。両者の調和と相互関が不可欠なのです。

サンスクリット語では、菩提樹をアシユヴァッタ

(*astwatha*) といいます。もともと「馬を停める場所」という意味です。その昔、クシャトリヤ階級の王族や武人が馬を菩提樹につないだからです。馬は疲れ果てないかぎり、荒々しいものです。馬たちが本能のままに駆ける姿は、モンゴルに行けば見られるでしょう。自然の中を疾駆する馬を見るのは気持ちのよいものです。

ブッダは、アシユヴァッタの木の下で瞑想しました。私たち人間の心、落ち着きのない心が、しっかりとした価値の体系を見出すには、どうしたらよいのか——と。ブッダはこの木の下に座り、手のつけられない暴れ馬、つまり私たち人間の心を統御したのです。ユネスコ憲章は「戦争は人の心の中で生まれるものである」という一文で始まります。私なら、「平和は人の心の中で生まれるものである」としたでしょう。悟り、サンスタリット語でいうボーデイは、ボーデイチッタ (*Bodhi-citta*) すなわち「菩提心」から始まるのです。ブッダは、菩提樹の下に49日間、座っていました。空腹に耐え、馬、つまり心を御しながら。

仏典の最古の部分には、こんなくだりがあります。「彼は青空に映えるピッパラ (菩提樹) の葉を見上げた。葉の先端が前後に揺れ、まるで彼を呼んでいるようだった。葉をじっと見つめていると、彼には太陽と星々の存在がはっきりと見えた。太陽がなければ、光と温かさがなければ、葉は存在できない。彼はまた、葉の中に雲の存在を見た。雲がなければ、雨は降らない。雨が降らなければ、葉は存在できない。彼は、大地、時間、空間、心を見た」

私は、この心という言葉に留意したいと思います。「すべては葉の中にあつた。実際、あの瞬間、一枚の葉の中に全宇宙が存在していた。葉の存在そのものが、驚くべき奇跡だった」

平和というのは、生態系の平和のことです。生態系がなければ、心も、人間性も、生命も存在しません。平和というと、私たちは真っ先に社会の平和を思い浮かべます。しかし、すべてを超越することで、社会的、政治的、あるいは地球的平和の前提となる精神的平和がもたらされるのです。インドでは、シャンティ (平和)

蓮華が象徴するもの

を3回唱えます。「Shamhi, shamhi, shamhi」と。最初のシャンティは生態系の平和です。私たち人間と自然とが調和した状態です。2番目は社会の平和です。社会、国々の中の平和です。3番目が、平和のすべての要素の前提となる精神の平和です。

ブッダは菩提樹の下に座り、馬すなわち心を十分に調御されました。(パキスタンの)タキシラにアレクサンドロス大王の馬のストゥーパ(塔)があります。ダルマラージカ・ストゥーパです。アレクサンドロスはこの馬で長い遠征を成し遂げました。インドに到達したとき、何千マイルもの距離を駆けてきた疲れと暑さで馬は息絶え、その死を悼んでタキシラにストゥーパが建てられたのです。ストゥーパは今も廃墟のなかに残っています。

この馬は何を象徴しているのでしょうか？

それは単にアレクサンドロスの馬であるというだけではありません。調教され、統御され、より高い精神的存在となった馬、すなわち心なのです。

法華経が「蓮華の経典 (Lotus Sutra)」とよばれるようになったのは、なぜでしょうか？ サンスクリット語の法華経には4色(紅・青・黄・白)の蓮華が出てきます。鳩摩羅什はすぐれた創造的翻訳者でしたが、そのうち黄蓮華については触れていません。紅、青、黄、白は、人間の活動のさまざまな様相を表しています。最高の色は白です。純粹な色であり、意識がこの上なく澄んだ状態を示します。

法華経は色の調和を象徴しています。朝陽の7色の調和と同じです。これは物理の原理で、violet (紫)、indigo (藍)、blue (青)、green (緑)、yellow (黄)、orange (橙)、red (赤)の7色——頭文字をとってVIBGYORといいますが——を表しています。7色は個々の色としては見えません。太陽の光の中で調和し、共存しています。太陽の光は、私たちにすべての農の世界を与えてくれます。農業は人間の生活に不可欠なものです。

なぜ馬ではなく蓮華がシンボルになっているのです

ようか。

蓮は村のぬかるみで育ちます。村で最も汚れた池に、最も美しい蓮が育つのです。蓮の美しい花と泥の共存

——それを人間の意識に反映させているのです。生命のマイナスの側面は、それがいやであっても追い払うことはできません。マイナスを受け入れ、それをプラスに変えなければなりません。プラスの側面とマイナスの側面は共存しなければならぬのです。蓮の花の美しさと泥は共存しています。共存しているだけでなく、象徴的な共生関係にあります。この共生関係が、蓮華の4色に反映されているのです。人生のさまざまな要素、さまざまな言語、さまざまな民族の共生が、物質性と精神性が共存する白い蓮に象徴されているのです。

池田会長は、仏教の教えを深く体得しておられます。会長はアルハット (Ergo || 阿羅漢) の体現者です。生命について書き、生命を感じ、生命を崇敬することによって、会長は人間の意識の広がり象徴しておられるのです。

以前、カラン・シン博士 (ネルー大学前総長) から「ヴェーダーンタ哲学では、最後にはアーナンダ (歡喜) に至る。しかし、仏教ではドウクハ (duḥkha || 苦) のことしか言わないのはなぜか」と尋ねられたことがあります。そのとき私はシン博士に、仏教に関する池田会長の本の結論を読むよう勧めました。

(入滅間近の) ブッダはアムラパリの家で最後の夕食をとり、ヴァイシャーリーの村を後にするとき、振り返って「ヴァイシャーリーのなんと美しいことよ！」と言いました。このことを池田会長は書いているからです。さらに示唆に富む言葉は、ブッダの言った「生きることはなんと美しい！」です。サンスクリット語では「*Manorimum Jivita*」といます。池田会長のすべての詩に、生命への讃歌が謳われています。会長の詩を読むと、私はブッダの最後の日々の言葉を思い出すのです。池田会長の魂、意識は、生命に価値を与えるブッダの最終地点を表現しているのです。

会長は、次のようなことを書いています。「自分を軽んじてはなりません。なぜならあなたは、自分自身の

中に大宇宙を抱いているからです」。これは（最古の經典

とされる）アーガマ（阿含）の思想を表しています。心

を高め昇華させれば、心の中に大宇宙が包みこまれ、
生命はまばゆく輝くのです。これこそ人間革命です。

しかし、生命の輝きと生命の泥の両方が調和して共存
しなければなりません。多様性、差異、矛盾、それら
の調和と相互連関が、生命の「核」なのです。なくな
ってよいものは何もありません。受け入れ、昇華させ
ねばなりません。

インドにこの美しい菩提樹園を実現してください
池田会長に、重ねて深く感謝いたします。

菩提樹が仏教で象徴しているものについて、誰かが
本を書かねばなりません。初期仏典、中国語經典、チ
ベット大藏經、パリー語經典、サンスクリット語の經
典では、菩提樹はどのように表現されているでしょう
か。インド仏教美術の初期には、菩提樹はブツダの悟
りを表しました。

制御されぬ野生の馬だった「心」は、ブツダを輝か
せる光明となりました。やがて、それは私たち自身の

ルネサンス（再生）をもたらすことでしよう。

(Lokesh Chandra / インド文化国際アカデミー理事長)